

説教 『ひたすら走る』

聖書 創世記28:15/フィリピの信徒への手紙3:12~14

「目標を目指してひたすら走る(フィリ° 3:14)。「賞を得るため(3:14)」ということから、ギリシア的な競技の比喻だろう。パウロには「自分がキリスト・イエスに捕えられている(3:12)」自覚がある。だが、自分の手で「既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者になっているわけでもない。何とかして捕えようと努めている(3:12)」らしい。捕えられてはいるが自分では「捕えたとは思っておらず(3:13)」その途上だと。「捕えられている」がゆえに、自分の手でもそれを「捕えようとしている」のだ。「キリストに捕えられた」パウロは、不完全なままひた走る(3:14)。苦難に遭っても(1:17)、板挟み状態で不安定(1:23~24)でも、きつい山岳マラソンをしているような奇妙な明るさが感じられる。

スポーツ競技の比喻として想像すると、私たちはこの場面のどこにいるのか。コロセウムの観客か、選手を判定する審判員か。彼らは、私たちではない。明らかに、私たち一人ひとりが選手として召されている。「神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標をめざしてひたすら走ること(3:14)」。これは速度や技を競う種目ではない。だから賞は一等や優等のような限定ではなく、あえて名づければ「完走賞」か。神の命を自ら精一杯「燃やし尽くす」賞なのだ。

通常の競技であれば、時間切れや棄権退場もありえるが、私たちを捕えているキリストは傍らで、選手の快復を辛抱強く待つ。日が暮れても、翌日になっても、驚くほど気長に待っておられる。捕えられている私たちは、十分に休息して再び立ち上がる。そして「後ろのものを忘れて、前のものに全身を向けて(3:13)」走り出す。「後ろのもの」、すなわち過去は今の私たちを抑圧する。用心が過ぎて、脚力や自信、可能性を狭い枠にはめようとする。称賛された過去が、傷つき後悔した過去が、私たちを縛る。それが自分の経験則だからだ。だが過去は、後方でみるみる遠景になっているのではないか。

走ることはままならず、歩行の速度が衰えたからといって、それが何であろう。いつだって傍らのキリストに捕えられているのではないか。硬直したアイデンティティを忘れ(3:13)、「前のものに全身を向けつつ」神の命を燃やし尽くす。「前のもの」に、「神がキリスト・イエスによって上へ召す(3:14)」領域へ、幾分前のために「全身を向けて」進む。「なすべきただ一つのこと(3:13)」を覚えながら。

「なすべきことはただ一つ」とは、「いろいろやっていないで一つに集中しろ」ではない。やりたいことは、つまらぬ斟酌をせず気が済むまでやればよい。関心事も、自分の歴史も、暮らしを立てる生業も、瑣末に見える事柄も、すべてをひっくるめて、あざなわれる縄のごとく「ただ一つ」へ流れ込むから。「わたしにとって、生きるとはキリスト(1:21)」なのだから。それが、今と未来をつくる(3:13)。

「後ろのもの」や自我意識が混濁する睡眠時、ヤコブは夢で神の声を聞く。「見よ、わたしはあなたと共にいる。あなたがどこへ行っても、わたしはあなたを守り、必ずこの土地に連れ帰る(創世28:15)」。夢では天と地が結びついている(28:12)。天の階段は地に伸びており、私たちは「この土地」に向かってひた走る(フィリ° 3:14)。それまで、それから、私たちはキリストに捕えられ続け、神と共に在る。

【おまけのひとこと】

降誕時には羊飼いが走った(ルカ2:16) 復活時にはペトロが走った(ルカ24:12) 主にむかって走る者は疲れない(イザヤ40:31) パウロのようにひた走りたい(フィリ° 3:14) 不安があっても明るく走りたい